

『紅樓夢』に見られる‘給’の使役的用法

今 井 敬 子

要 旨

本稿は、清代北京語で書かれた『紅樓夢』から例文を引用し、‘給’が使役的に用いられている構文を取り上げて、主にその構造上の特徴と構造成立の条件について考察している。その結果、構造成立のためには‘給’の直接目的語の存在が条件となっていること、それは行為の発生以前にすでに存在する物でなければならないことを指摘し、また、文法的規制がはたらいて‘給’の直接目的語が構造内に置かれない時は、直前に〈動詞＋名詞〉構造が設定されてその中に置かれることなどを明らかにしている。さらに、『紅樓夢』の言語の中に〈動詞＋名詞＋‘給’＋人〉という構造が存在することに注目して、‘倒茶給他喝’＝(倒茶給他)＋(給也喝茶)と分析することによって、最初の行為(‘倒茶’)の受け手と、次に続く行為(‘喝茶’)の主体とが同一人物を指すというこの構文の特徴を明らかにしている。

目 次

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 0. はじめに | 2.3. ‘VN給人’構造 |
| 1. 現代中国語の‘給’使役構造 | 2.4. ‘給’使役構造の拡張 |
| 2.0. 『紅樓夢』の‘給’使役構造 | 3. おわりに |
| 2.1. 構造成分の特徴 | 参考文献リスト |
| 2.2. 授与対象物の種類と位置 | |

0. は じ め に

清代北京語の代表的な文法資料として広く認められている『紅樓夢』は、その言語の基本的構成が現代中国語とほぼ一致していると認められながらも、その実、様々な点で異った様相をみせており、現代中国語の成立の経緯を知る上で、たいへん興味深い資料である。筆者はすでに『紅樓夢』の受動表現について論じているが¹⁾、本稿では、‘給’が使役的な意味をもって用いられている文を取りあげ、主に、その構造上の特徴と、その構造を成立させている条件について、現代中国語の場合と比較するという方法で、考察を試みる。資料は、曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』(全三冊、人民文学出版社、1985年)を用いるが、これは前80回がいわゆる庚辰本を底本とし、後40回がいわゆる程甲本を底本としている。

1. 現代中国語の‘給’使役構造

現代中国語で用いられる‘N_a 給 N_b VN’という形式は、Vによって表わされる行為の主体

が N_a の場合と N_b の場合があるが、後者の場合の‘給’は使役的な用法であると理解されている。施(1981)によると、‘給’が使役的に用いられる時は、たとえば：

S₁ 我給你看一本書。(わたしはあなたに本を見せてあげる。)

という文は

S₂ 我給你一本書看。

という文に変換できるという。そして S₂ の文成分のそれぞれは：

- ・‘一本書’は‘我’が所有するものであって、‘看’という行為が発生する以前にすでに存在している。
- ・‘看’という行為は‘你’によってなされる行為であり、‘給’は動詞として用いられている。

という条件を備えていると述べている。つまり施の分析によると：

S₁ 我給你看一本書=我給你一本書+你看一本書

ということになる。施は、S₁ のように‘給’が使役的に用いられている構造(以後‘給’の使役構造と呼ぶ)の中に通常見られる動詞は、‘看’のほか‘吃’、‘喝’、‘抽(烟)’、‘听’などの限られたものだけであると指摘しているが、なぜそうであるかという点については説明を加えていない。

太田(1956)は北京語の‘給’の用法について考察をしている中で：

給你看看(这个)

という例を挙げ、‘給’の直接目的語と‘看’の目的語とが同一物である場合に限り、‘給’使役構造が成立すると述べている。(目的語は省略されて表面の文中には現われないことがあるので、太田は上例の中の‘这个’を括弧でくくっている。)そして、上の条件を備えていても：

我給你写信

の場合は‘給’使役構造ではないと言い、なぜなら‘信’を与えてその後にかけるわけではないからとその理由を述べている。つまり、太田の理解は施の場合と等しいものである。

泉(1985)は、‘給’使役構造の来源は南方諸方言にあるという考察を示しており、北方語は本来この構造をもっていなかったが：

他給我吃了一个馒头=他給我一个馒头吃のように、北方語に存在するところの二重目的語文に変換しうるような例に限って借用したと述べ、このような用法を、「与えられる物」(泉の挙例の中では‘馒头’)の存在を条件とした用法であると言っている。

以上のことから、北京語及びそれを基礎として成立した現代中国語の‘給’使役構造の成立条件は次のようにまとめられる。

‘給’使役構造を‘給 N₁VN₂’と一般式で表わすと：

1. Vの目的語であって同時に‘給’の直接目的語であるような N₂が存在すること。
2. Vによって表わされる行為が発生する以前にすでに N₂が存在していること。

これらの条件をふまえて、『紅樓夢』に見られる‘給’使役構造についての調査と考察をすすめてみる。

2.0. 『紅樓夢』の‘給’使役構造

『紅樓夢』には‘給’使役構造が数多く見られるが²⁾、Vの位置に見られる動詞は‘吃’(‘喝’)‘看’(‘瞧’)が圧倒的に多く、この点では、施の指摘による現代中国語の場合と同じ様相を

呈している。‘听’はわずかしか見られないが、一方で‘説給’、‘説与’という形式が頻用されており、これらと共に起してたとえば‘説給他听’のような形で多く出現する。‘看’、‘瞧’の場合も後40回になると、この形式が増えて、たとえば‘送給他瞧’のような例が比較的多く見られるようになる。以下の表は多用される動詞の出現件数を示したものである。表中の（ ）内には、‘説給’などのような‘V 給’形式と共に用いられている場合の件数が示してある。

『紅樓夢』	動詞	吃又は喝	看又は瞧	听	その他	合計
前 80 回		47(4)	42 (7)	6(10)	20(29)	115(50)
後 40 回		10(0)	16(19)	3(11)	16(5)	45(35)

(表：‘給’使役構造に用いられる動詞の出現件数)

その他にも様々な動詞が用いられているが、例文を挙げて検討をすすめてみる。

- (1)～、把咱们的女孩子們叫了来，就在这台上唱两出給他們瞧瞧。(54回761頁)(うちの女の子たちを呼んできてその舞台で二、三幕歌わせ、あの子たちに見せてやりなさい。)
- (2)～、要拿毒药給我吃了治死我，～(44回608頁)(私に毒薬をのませて亡きものにしようとし～)
- (3)一时又拿一件灰鼠斗篷替他披在背上，一时又命拿个拐枕与他靠着。(52回735頁)(灰鼠ちゅうのマントを彼女の背中にはおらせてやったり、脇息を持ってこさせて彼女によりかかせてやったりした。)
- (4)再或有咱们常时积攒下的钱，拿几吊出去給他养病，～(77回1106頁)(それからぼくらが普段貯めているお金があるなら、いくらか持ち出してやってあの子に療養させてやれば～)
- (5)～、要天山的月亮，也有人去拿下来給他頑。(83回1196頁)(空のお月さまが欲しければ、取ってきてあの方のおもちゃにしてさし上げる者がいるのだ。)
- (6)～、只求两间净屋子給他誦经拜佛。(117回1604頁)(せめて一間か二間の清浄な家をさがして、そこで彼女にお経を誦んだり仏様を拜んだりさせてやる。)
- (7)～、向案上斟了茶来，給羹人漱了口。(31回429頁)(卓子の上からお茶をくんできて羹人に口をすすがせてやった。)
- (8)栳翠庵圈在园内，給四妹妹静养。(120回1641頁)(権翠庵は園の中に取り込んで、妹にそこで修養をさせてやります。)
- (9)还有年下你们添补的衣服，还没打点給他們做去。(45回618頁)(それにお正月にあなたがたに補充してあげる服も、まだあの者たちに作らせる用意ができてないんです。)
- (10)～、进来拿金线きんせん与莺儿打络子，～(35回484頁)(入ってきて金糸を鶯児に手渡し、それで網袋を編ませた。)
- (11)～、包些家去給他們做花样子去倒好。(41回567頁)(少し包んで持って帰り、あの子たちに模様の型をつくらせてやったらよいでしょう。)
- (12)～、先到隔壁将倪二的信捎了与他娘子知道，方回家来。(24回336頁)(まず隣家へ行って倪児のことづてを女房に伝えて知らせてやり、それから帰宅した。)
- (13)賈母忙命拿几个小杌子来，給頼大母亲等几个高年有体面的妈妈坐了。(43回592頁)(賈

母はさっそく小さな腰掛を持ってこさせ、頼大の母親など年寄りで身分の高い者数人に腰かけさせてやった。）

(14)～, 下剩的添上里子, 做些夾背心子給丫頭們穿, ～ (40回548頁) (残りの<紗>は裏をつけてそでなしを何着かつくり, 女中たちに着させてやりなさい。)

(15)～, 必要女婿過門贅在他家, 給他料理些家事。 (84回1213頁) (何としてもあちらさんは婿を迎えて, その婿に家の切り盛りをしてもらいたがっている。)

(16)～, 因此開恩打友他出去了, 給他老子娘隨便自己揀女婿去罷。 (72回1023頁) (ですからお慈悲であの子に暇を出してやり, あの子の両親に自由に自分たちで婿を選ぶようにさせてやったのです。)

(17)正經給他們茶房里煎去, ～ (51回720頁) (やはりこの人たちに湯沸し場で煎じさせましょう。)

(18)又命两个婆子將司棋所有的東西都与他拿着。 (77回1100頁) (また, ばあや二人に命じて司棋の私物をすべて司棋にもたせた。)

2.1. 構造成分の特徴

上掲の例文について, まず‘給’使役構造(‘給’ N_1VN_2)のVと, その目的語 N_2 について検討してみるために, それらを以下に書き出してみる。 N_2 はVの論理上の目的語であればよいので, 表面の文の中では必ずしもVの後に置かれているとは限らない。また, N_2 が同時に‘給’の直接目的語となっているかどうかについてはひとまず不問に付し, 後で考察する。

例文番号	V	N_2
(1)	瞧	兩出(戏)
(2)	吃	毒葯
(3)	靠	拐枕
(4)	养病	
(5)	頑	
(6)	誦經拜佛	
(7)	漱口	
(8)	静养	
(9)	做	衣服
(10)	打	綵子
(11)	做	花样子
(12)	知道	信
(13)	坐	小杌子
(14)	穿	夾背心子
(15)	料理	家事
(16)	拣	女婿
(17)	煎	(葯)
(18)	拿	東西

(4)~(8)はVの目的語が存在しない例である。(5)の‘頑’と(8)の‘静養’は自動詞であり、(4)の‘養病’、(6)の‘誦経’、‘拜佛’、(7)の‘漱口’は<動詞+目的語>という構成ではあるが、両者の結合がかたく、固定的な表現となっているため、通常一つの単語(複合語)とみなされている。これらは、動詞と目的語との間に自由に連体修飾成分を置くことができない。たとえば(4)の場合、‘*养你的病’、‘*养肝臟病’などとは通常言えないので、‘養病’の‘病’はN₂の位置に置くことはできないといってよいであろう。泉(1985)の挙例にも、<動詞+目的語>の構成をもつ複合語が用いられている次の例がある。

(19)…只給一两个读书呢，…(一人，二人だけ学校にやるとすると…)

この例は現代中国語の文法論理からすると非文であると指摘されている。

(1)の‘戏’と(17)の‘葯’は引用文の中には出現しないが、先行する文の中で提示されている。その他の(2)、(3)及び(9)~(18)の場合はVの目的語を備えていることがわかる。⁴⁾

次に、Vによって表わされる行為が発生する以前に、N₂がすでに存在していなければならないという点について検討をしてみる。(9)、(10)、(11)はこの条件を満たしていない例である。たとえば(9)の‘做衣服’は、先に‘衣服’があってその後に‘做’という行為が遂行されるのではない。‘衣服’は‘做’という行為の結果生み出される物である。(10)の‘打絡子’、(11)の‘做花样子’の場合も同様である。このように、①Vの目的語が存在しない例、②Vの目的語が、Vによって表わされる行為が発生する以前には存在していない例が見られることがわかった。

先に引用した施や太田の挙げる例は、文脈を一切考慮に入れていないのに対して、『紅樓夢』から引用した例文は、文脈を背景としたものであるという違いはもちろんある。単独の文として提示されると非文になるようなものでも、文脈の中に置くことと成立するということはしばしば見られる。しかしその場合にも、必ず何らかの規則がはたらいっているはずである。文脈の中に置くということは、言い換えればより広い構造の中に規則を求めるということにほかならない。たとえば、行為の発生以前にあらかじめ存在するものが‘給’使役構造の内部に見出せないとしたら、それはその構造の外に置かれているかもしれない。

2.2. 授与対象物の種類と位置

『紅樓夢』では、‘給’使役構造の直前に<動詞+目的語>の構造が置かれている例が多数見られる。時には目的語は省略されているし、‘把’に導かれて動詞の前に置かれていることもあり、また、動詞が‘来’、‘去’などの趨向補語を伴っている場合もあるが、いずれの場合も共通して、後続する‘給’使役構造との間に一定の構造関係が見られる。(以後この構造を‘V₀N₀’⁵⁾と略記する)(1)~(18)の文の中から一例を挙げると：

(3)拿个拐枕与他靠着。

アンダーラインの部分が‘V₀N₀’に相当する。後続する‘給’使役構造のN₂の位置が空位になっているのは、N₀とN₂がともに‘拐枕’を指すためで、(3)は実際は‘拿个拐枕与他靠着拐枕’に等しいが、同語反復を避ける規則がはたらい N₂は省略されている。この場合、

‘給’使役構造を中心にして見ると、本来はN₂の位置に来るべきはずの‘拐枕’が、‘給’使役構造の外にあるN₀の位置に移行していると考えることができる。N₀の‘拐枕’は‘給’使役構造内のV(‘靠’)の論理上の目的語であり、同時に‘給’(ここでは‘与’)の論理上の直接目的語でもある。また、‘拐枕’は‘靠’という行為発生の前にすでに存在している。これらのことから次のような構造式が得られる。(式の中の◁記号は省略されている行為主体を表わす)

◁ 拿个拐枕与他靠着 = ◁ 拿个拐枕 + ◁ 与他个拐枕 + 他靠着个拐枕
(給)

この例の‘拐枕’のように、‘給’の直接目的語であり、かつ行為発生前にすでに存在しているものを授与対象物と呼ぶこととする。上の例はN₀とN₂が同一物を指しているが、互いに異なるものを指す場合もある。たとえば：

(10) 拿金线 与 莺儿 打 络子

この例ではN₀は‘金线’で、N₂は‘络子’である。‘络子’が‘打(络子)’という行為の結果生み出されるもので、行為の前に存在するものではないことはすでに述べた。さて、‘V₀N₀’の‘拿金线’と‘給’使役構造の‘与莺儿打络子’とは互いに無関係の行為ではない。「金糸を手を持って(それを鶯児にわたし、その金糸を材料にして)鶯児に網袋を編ませる」のである。ちなみに伊藤訳⁵⁾は、「手にした金糸を鶯児に渡して編みにかからせます」となっているし、松枝訳⁶⁾は「金糸を鶯児に渡して網袋を編ませた」となっている。N₀の‘金线’は‘打(络子)’という行為の発生以前にすでに存在する。また、‘給’の論理上の直接目的語でもあるので授与対象物であると言える。ただし‘金线’はVの目的語ではない。これらのことから次のような構造式が得られる：

◁ 拿金线 与 莺儿 打 络子 = ◁ 拿金线 + ◁ 与 莺儿 金线 + 莺儿 打 络子
(給)

(3)の場合のように、授与対象物が同時にVの目的語である場合を‘給’動対象物と呼び、(10)のように、同時にVの目的語とはなっていない場合を‘給’対象物と呼びわけることとする。すなわち：

授与対象物 $\left\{ \begin{array}{l} \text{‘給’ 対象物} \\ \text{‘給’ 動対象物} \end{array} \right.$

となる。(9)(11)の場合を分析すると：

(9) 打点 给 他们 做 (衣服)

(11) 包些 家去 给 他们 做 花样子

N₀は省略されているが、(9)のN₀は‘衣服’を作るための材料の布であり、(11)のN₀は‘花样子’を作る材料の‘面果子’である(‘面果子’は先行する文の中で提示されている)。したがって、‘V₀N₀’の本来の内容は、(9)打点布料、(10)包些面果子であり、ここではそれぞれの

N₀が‘給’対象物になっている。

このように、授与対象物には、それがVの目的語と同一物の場合と、そうでない場合とがあると分析した。施，太田などが指しているのは前者である。

Vの目的語が存在しないような(4)～(8)の場合は、‘給’使役構造の内部に授与対象物は見い出せない。しかし、先行する‘V₀N₀’にまで範囲を広げて考えると、たとえば(4)の場合は：

(4) 拿几吊出去給他养病

「お金をいくらか持ち出して（それをあの子に与え，そのお金で）療養させる」のである。ここでは N₀の‘几吊（錢）’が‘給’対象物である。(5)～(8)の場合は：

(5) 拿下（月亮）来給他頑

(6) 求兩間浄屋子給他誦經拜佛

(7) 斟了茶来給菱人漱了口

(8) 栳翠庵園在园内給四妹妹静养

(5)の N₀の‘月亮’は‘V₀N₀’の中では省略されているが、先行する文の中で提示されている。また、(8)の場合は N₀の‘栳翠庵’が構造内の主語の位置に置かれている。(8)では、「栳翠庵は園内に取り込んで（その栳翠庵で）妹に修業をさせる」という意味が表わされており、‘栳翠庵’が‘給’対象物である。(5)の‘月亮’、(6)の‘兩間浄屋子’、(7)の‘茶’もそれぞれ‘給’対象物を指していて、すべて N₀の位置にある。これらの場合は、Vの目的語は存在しないが‘給’対象物は存在する。

以上のように、①Vの目的語が存在しない例も、また、②Vの目的語は存在するが、それがVによって表わされる行為の発生以前には存在しない場合も、ともに‘給’対象物は存在することがわかった。これらの‘給’対象物は、‘給’使役構造の直前に置かれている‘V₀N₀’の N₀の位置にあらわれる‘給’対象物と、‘給’使役構造の中の V 又は VN₀によって表わされる行為との間の関係には次のようなものがみられる：

- a 材料：(9)布料——做衣服 (10)金綫——打絡子 (11)面果子——做花样子
- b 場所：(6)浄屋子——誦經拜佛 (8)栳翠庵——静养
- c 広義の手段：(4)錢——养病 (5)月亮——頑 (7)茶——漱口

授与対象物の存在が、‘給’使役構造成立のための必要条件であるならば、上の諸例のように、‘給’使役構造内部に授与対象物を置く場を確保できない場合には、構造の外部にその場所を求めなければならない。その場所がすなわち‘N₀V₀’であって、このような場合には、‘V₀N₀’は必須のものとなってくる。これに対して、Vの目的語と授与対象物とが同一物の場合（つまり‘給’動対象物の場合）、‘V₀N₀’構造は特に必要ではない。(1)～(18)の中からそのような例を挙げてみると：

- (15) 給他料理些家事
 (16) 給他老子娘隨便自己拣女婿⁷⁾
 (17) 給他們茶房里煎(葯)
 (18) 將司棋所有的東西都與他拿着

(17)はN₂の‘葯’が先行する別の文中に置かれているため‘給’使役構造内では省略されている。(17)の例文は単独で独立文として用いられている。また、(18)はN₂の内容が長いために、‘將’に導かれて‘給’使役構造の前に引き出されたもので、このような場合は‘將’以下が‘給’使役構造であると理解される。(15)~(18)に見られる‘給’使役構造は、いわば自足した構造である。しかし、『紅樓夢』の中では実際にはこのような例は比較的少ない。N₂がVの目的語でもあって、同時に授与対象物でもあるような場合でも、‘給’使役構造の前に‘V₀N₀’が見られることが多い。Vの位置に‘吃’や‘看’(‘瞧’)が多く用いられていることはすでに指摘したが、これらの動詞が用いられる場合は、その目的語の内容と授与対象物とが一致している例がほとんどである。それにもかかわらず、自足した‘給’使役構造は比較的少なく、たとえば(1)や(2)のように、直前に‘V₀N₀’が置かれている例が多く見られるのである。このような現象は決して偶然のものでもなく、また、作者の好みに拠るところの表現形式というふうなものでもなく、『紅樓夢』の言語のもつ文構成法の中に、その根拠を求めることができると思われる。以下、この点について検討を進めてみる。

2.3. ‘VN給人’構造

現代中国語では通常‘写信給他’や‘打电话給他’とは言わず、‘給他写信’、‘給他打电话’という言い方を用いて、行為の受け手を動詞の前に置く。しかし『紅樓夢』には前者(以後‘VN給人’という一般式で表記することがある)の形式が見られ、このことはすでに他でも指摘されている。⁸⁾ ‘VN給人’の実際の例としては、たとえば次のようなものが挙げられる：

- (20) 怪道你送東西給我，原来你有事求我。(24回338頁) (あなたが私にものをくれたのもともと私に頼みごとがあったからなのね。)
 (21) ~，太太递了一块糕給他，誰知凤地里吃了，就发起熱来。(42回576) (奥様が糕子を嬢ちゃまに一つ渡して下さったら、どうでしょう、それを風の中で食べたので、熱が出てしまったんです。)
 (22) 宝玉连忙叫人传話与焙茗：“~ (84回1206頁) (宝玉は急いで人を遣わして、焙茗に話を伝えさせ~)
 (23) 王信那辺又透了消息与察院，~ (69回976頁) (王信の方ではまた都察院に事情を洩したので~)
 (24) 不但好，而且留了多少地步与后人。(50回686頁) (<熙鳳の発句は>けっこうなばかりか、後に続く人に充分余地を残してありますね。)
 (25) 因下雪珠儿，老太太找了这一件給我的。(49回676頁) (ぼたん雪になったので、お祖母様がこれ<マント>をさがして下さったんです。)
 (26) 另日再挑个好媳妇給你。(44回614頁) (いずれお前にいい嫁さんを選んであげよう。)

- (27) 下剩的，我写个欠銀子文契給你。(25回351頁) (残りの〈借金〉は、銀子の借用証書を書いてさしあげます。)
- (28) 我就是他的人丁了，決不肯再失身給別人的。(92回1307頁) (私はこの人のものです。もう二度と、他の人のため貞操を失うようなことはありません。)
- (29) 若說再添一个人給老太太，这个还可以裁他的。(36回489頁) (もしまた大奥様に〈女中を〉ひとり増やしてさしあげるんでしたら、この女中の受取分は削ることもできましよう。)
- (30) 我們听見姨太太这里有一种丸药，上棒疮的，姑娘快寻一丸子給我。(48回662頁) (こちらの奥様のところに丸薬があって、打ち傷に効くとお聞きしましたので、お嬢様、私に一粒融通してもらって頂けますか。)
- (31) 你这一去，带儿信个給旺儿，就說奶奶的話，～(39回538頁) (あんたこれから行って旺児さんにことづけてちょうだい。若奥様のおことばだといって～)
- (32) 每人打一頓給他們，看还關不關了。(77回112頁) (みんながあの子たちをしたたかに打ったら、それでも〈あの子たちが〉まだ騒ぐかどうかみてごらん)

(20)の文の‘送’，(21)の‘遞’，(22)の‘傳’などの動詞や，(13)の‘透消息’，(31)の‘帶信’，(32)の‘打一頓’などの動詞句によって表わされる内容は，それ自体が行為の受け手の存在を含蓄しているという共通の特徴をもつ。‘遞’が‘VN 給人’構造の中で用いられている例は，上掲のほか一例あるだけで，‘遞’と‘給’が共起して用いられているその他の例はすべて‘送与’(49例)，‘遞給’(17例)という形式をとっている。『紅樓夢』では，‘遞’の場合はこの形式がすでに確立し，定着していることがわかる。これに対して‘送’は，‘送与’(17例)，‘送給’(9例)はむしろ少なく，‘給人 VN’の形式が最も多く見られ，‘VN 給人’がこれに次いで多く用いられている。たとえば『紅樓夢』の第7回112頁には，次のような例が見られる。

- (33) 这会子又被姨太太看見了，送这几枝花儿与姑娘奶奶們。(今度はまた叔母さまに見つかってしまって，この花かんざしをお嬢様方や若奥様方にお届けするのよ。)
- (34) 你且家去等我，我給林姑娘送了花儿去就回家去。(お前は家へ帰って私の帰りを待っていなさい。林お嬢様に花かんざしをお届けしたらすぐに帰るから。)

この二つの例は，どちらも周瑞の妻がその娘に向かって語っている内容であり，同一場面での二人の一連の会話中の一部分である。(33)では‘VN 給人’，(34)では‘給人 VN’がそれぞれ用いられているが，形式の違いが特に意味の違いをもたらしているとは考えられない。朱(1985)によると，現代中国語では，‘V 給’という形式をとることのできる動詞(たとえば‘送’，‘遞’，‘傳’，‘賣’など)が‘給人 VN’形式の中で用いられると，その時の‘給’によって導かれる‘人’は，行為の受け手ではなくサービスの対象を示すという傾向があるという。⁹⁾たとえば‘給他送信’は「彼のために(彼に代って)手紙を送る」という解釈が通常なされるという。しかし『紅樓夢』では，‘送’に関してはそのような例はほとんどなく，‘給他送信’のような形式をとった場合も，‘他’は行為の受け手(つまり手紙の受け取り手)を表わしている。‘VN 給人’構造の中で用いられる動詞(または動詞句)には，受け手の存在を必ずしも必

要としないような行為を表わすものも見られる。例文(24)～(30)はそのような例である。再び朱(1985)によると、‘我打一件毛衣給他’の中には‘打毛衣’と‘把毛衣給他’との二つの行為プロセスが存在するが、これに対して‘我送一件毛衣給他’の場合は、分離された複数の行為プロセスは存在しないという。¹⁰⁾すなわち‘送’の場合は‘送毛衣’という行為の中にすでに‘把毛衣給他’という行為が含まれているという理解の仕方であると考えられる。例文中の‘給’を動詞として捉えるところからこのような分析が生じている。この分析では、行為の受け手の存在を含意しない‘打(毛衣)’のような動詞が用いられている場合は、‘給他’(彼に与える)が文中で意味をもつが、行為の受け手の存在を含意する‘送’のような動詞が用いられると、動詞としての‘給’は何ら積極的な意味をもたなくなるのである。朱のこのような分析は、‘VN 給人’構造をもたない現代中国語の文法論理に依拠したものである。現代中国語では、行為の受け手を導く‘給’は通常動詞の前に置かれる。したがって、上例のように動詞構造の後に置かれた場合、その‘給’は動詞であるという解釈になる。これに対して『紅樓夢』の言語のように、‘VN 給人’構造をもつもの場合は、上例の‘我送一件毛衣給他’と‘我打一件毛衣給他’とを、同一形式同一構造として理解できるであろう。すなわち、用いられる動詞が‘送’タイプか‘打(毛衣)’タイプにかかわらず、‘給’が行為の受け手を導き、Nによって表わされる行為の対象物が、行為の結果受け手のもとに到達するということが‘VN 給人’構造によって表わされる内容である。(20)～(32)には、‘送’タイプと‘打(毛衣)’タイプの動詞が共に見られるが、いずれの場合も同一形式で同一構造であると理解される。

2.4. ‘給’使役構造の拡張

‘VN 給人’構造は、(20)～(30)の例文の中に見られるように、単独で文の述部を構成する場合もあるが、述部構造の一部として用いられていると考えられる場合もある。たとえば：

(35)“倒茶給師父們喝”。(115回1569頁)

2.2.ではこのような文を、‘給’使役構造の前に‘V₀N₀’構造が置かれたものと分析した。しかし、‘倒茶’という行為は‘師父們’とは無関係の行為ではなく、‘師父們’に向ってなされる行為であり、その結果‘茶’が‘師父們’の手に渡るという過程を経て、次に続く‘喝(茶)’という行為が成立する。これはあたりまえのことだが、それでは文中のどの部分で‘倒茶’と‘師父們’とのそのような関係が表わされているかと言えば、‘倒茶給師父們’の箇所以外にない。したがってこの文は、次のような二つの文によって構成されていると考えることができる：

倒茶給師父們	+	給師父們喝茶
A		B
(尼僧たちにお 茶を入れる)		(尼僧たちにお 茶を飲ませる)

上の構成文Aの成立は、『紅樓夢』の言語の中に‘VN 給人’という形式が存在することを

結果受け手のもとに到達するか（上の図では‘拿’という行為）という新しい情報をも同時に提示するので、本来は‘VN 給人’構造を必要としないような場合（‘給’動対象物の場合）にも、広く適用されることがわかるのである。

3. おわりに

‘給’の使役的用法は従来、使役標識の‘让’や‘叫’と同じような意味をもって用いられるというふうに説明されるだけで、それではどのような違いがあるのかということになると、十分な研究は筆者の知る限りでは見られない。本稿の考察からは、『紅樓夢』の‘給’使役構造成立のためには、あらかじめ授与対象物の存在が必要であることが立証された。このことは‘給’の本義からすると、当然のことかもしれない。しかしそこに‘让’や‘叫’を用いた使役構造との、構造上の大きな違いがあるのである。‘給’の使役用法には次の例のように、ほとんど強制的使役に近い意味に解釈できる例も見られる：

把你女儿剩水给我洗（58回824頁）（あんたの娘に水を使い残させて、それで私に洗わせるの？）

このような例にもやはり授与対象物（‘水’）が存在することで、他の使役構造とは明瞭に違っているのである。

『紅樓夢』の前80回と後40回との間には、‘給’使役構造成立の条件に関しては特に違いは見られなかった。たとえば‘給’対象物をもつような例は、前80回と後40回の両方に見られた。

2.4. で取り上げた‘给他买点点心吃’と、‘买点点心给他吃’のちがいは、連用修飾成分が后置詞から前置詞へと変化してきたという、中国語の歴史的な事実を背景としていられる。Huang (1982) の考察にもあるように、¹¹⁾ 古代中国語では‘与’は後置詞として用いられ多くの機能をもっていたが、それらの機能のほとんどが、現代語の介詞（つまり多くが前置詞、一部は前置詞と前置詞の両方をもつ）に置きかえられている。‘給’の場合は前置詞、後置詞の両方として用いられているが、上に挙げた二つの例文は、後置詞から前置詞への変遷を考察する上で一つのヒントになりうると考えられる。本稿では扱うことができなかったが今後の課題としたい。

註

- 1) 『紅樓夢』の受動表現』、『中国語学』第233号（1986）、及び「清代北京語文法の再検討——‘被’、‘叫’、‘让’をめぐる——』、『信州大学教養部紀要』第21号（1987）。
- 2) 『紅樓夢』には‘給’と‘与’が併用されているが、本稿では‘与’が用いられている場合も含めて‘給’使役構造と呼ぶ。
- 3) 『紅樓夢』で用いられている‘吃’は、現代語の‘吃’と‘喝’を総合した意味をもつ。‘喝’も用いられているが、その数は少ない。

- 4) 例(3)の‘坐’と‘小杌子’のように、動作とその帰着点を表わすもの場合は、‘坐在小杌子’のようにも言うが、‘坐小杌子’とも言うので、‘小杌子’は N_2 の位置に置けると考えてよい。
- 5) 伊藤漱平訳：『紅樓夢』（上冊）；『中国古典文学大系』第44巻，平凡社（1985），482～483頁。
- 6) 松枝茂夫訳：『紅樓夢』（全12冊），岩波文庫（1985）の第4冊，145頁。
- 7) 孫女婿の‘女婿’を‘給’動対象物とすることには異論が出るかもしれない。厳密に言えば授与対象物は複数の女婿候補者を指す。選ばれる者はその中の一人であり、全体と部分の関係にある。しかし全体と部分は互いに等質のもので、全く別個の分離されたものではないので、‘給’動対象物に準じるものと判断した。
- 8) たえとば志村（1984）396頁，伊原（1986）など。
- 9) 朱（1985），p.163. Li, C. N. and S. A. Thompson（1981）の p.302にも‘寄’について同様の指摘が見られる。
- 10) 朱（1985）. p.157.
- 11) Huang（1182），pp.165～200.

参考文献リスト

- Huang, Shuan-fan 黄宣範1982. Papers in Chinese Syntax (漢語語法論文集)。台北：文鶴出版。
- 伊原大策 1986。「所謂「兼語式」の変遷について——“VO在P”，“VO到P”，“VO給P”，“VO出来”など」，『中国語研究』第25号，pp.1～18。
- 泉敏弘 1985。「北方「給」使役・被動用の法来源」，『中国語学』第232号，pp.33～43。
- 香坂順一 1983。『白話語彙の研究』，東京：光生館。
- Li, C. N. and S. A. Thompson 1981. Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar・University of California Press. [中文訳：黄宣範訳：『漢語語法』，台北：文鶴出版1983]
- 李臨定 1981。「給劫句」，『語文研究』第2期，pp.17～30。
- 太田辰夫 1956。「給について」，『神戸外大論叢』第7巻第1～3号，pp.177～197。
- 施关淦 1981。「“給”的詞性及与此相关的某些語法現象」，『語文研究』第2期，pp.31～38。
- 志村良治 1984。『中国中世語法史研究』。東京：三冬社。
- 王力 1943—44。『中国現代語法』（上・下）。商务印书館，香港：中华书局（1979）。
- 朱德熙 1985。『現代漢語語法研究』北京：商务印书館。

CAUSATIVE USE OF 'GEI' (給)

IN

"A DREAM OF RED MANSIONS" (紅樓夢)

The present study examines the causative use of *gei* in "A Dream of Red Mansions", a well-known Pekinese work of Qing dynasty. Special attention is paid to the structural characteristics and the conditions for forming a construction with causative *gei*. I point out that the existence of a direct object of *gei* is indispensable for this construction, and that it has to exist before an act, represented by a verb in the construction concerned, is performed. Also, when *gei* has no direct object, by grammatical restrictions, the structure [verb+noun] is placed immediately before the construction to fill the place of the direct object of *gei*. I also present an original analysis of the structure of sentences with the construction concerned, e. g. (倒茶給他喝)=(倒茶給他)+(給他喝茶). The structure [verb+noun+*gei*+person] in the language of "A Dream of Red Mansions" suggested the above analysis, and through this analysis a significant characteristic of this sentence was shown fairly clearly, that is to say, the person to whom the first act (倒茶) is directed and the person who performs the second act (喝茶) are the same person.